



第43回

飛行機に乗った
ドン・キホーテ

Don Quijote, Vol.43 montado en un avión

texto: Takeshi Shimizu

スペイン各地での
エピソード⑥

典型的な 「白い村」 ミハス

トラン、カフェテリアなどが並び、銀行もいくつかあります。一番高いところにある闘牛場は、スペインでは最小ということで四角い形をしていました。訪ねたのは日曜日。太陽の光が弱くなりかける午後7時から闘牛の本番があるという。私は、かつてメキシコでも闘牛を見ましたが、その残酷さに、6頭の試合があるのを2頭分だけ見て早々に引き揚げた経緯があります。闘牛を理解できなければ、スペインを理解したことにはならないともいわれています。スペイン人と闘牛文化——是非、一度は研究しなければならぬテーマではありますが…。そんなわけで、ここは施設の見学だけでした。

観光客の一番のお目当ては、なんといってもサン・セバスティアン通りでしょう。写真ポイントの美しい通りとしてどの案内書にも紹介されています。それは、4メートル幅ほどで200メートルほどの長さの、狭い傾斜のある遊歩道でした。この日は、直射日光をさえぎるためか、歩道には白い天幕がかけられ、また近々フィエスタがあるのか、入り口ではその場で揚げたフライ料理を売っていました。天幕の下を進んでいくと、子供たちがこの狭い歩道で50メートルほどの距離を徒競走していました。カメラを向けるとヒョッと振り向き、手をあげてなかなかの愛嬌。私も白い壁に植木鉢の花が並んだ光景をいくつもフィルムに収めたのです。

郷土資料館には、まだミハスが観光地として開発される前の、農村時代の生活・耕作用具が展示されていました。50年ほど前のものようですが、驚いたのはそれが自分の幼少期に育った長野県の伊那谷のものに実に似ているのです。万能グワ、鋤、家畜に引かせる耕作用具等々。特に木造りで手動の、穀物の実と殻を選別するトウミが、子供の頃、農作業を手伝った時のものにあまりにもそっくりなのに、どちらの国が模倣したのか、それとも、それぞれが独自に開発したのかと、なかなか興味深いものでした。ここにも日本人観光客を主な対象とした土産物店がありました。その日本人従業員に「毎月、どのくらいの日本人観光客がこちらに来るんですか」と、買った品物の代金を払いながら聞いてみました。「え! 月にですか? 月というのとよくわかりませんが、今日も午前中に3台の日本人団体の観光バスが着いたんですよ」との返事。その数や推測すべし。

夜、家に帰ってテレビのニュースを見て驚きました。前日、同じコスタ・デル・ソルのリゾート地マルベリヤでは、ETAによるテロ爆弾が車が仕掛けられていたといわれています。「エッ、こんな地中海岸の観光地域に? なぜ?」翌日、新聞をみて背景がわかりました。ETAとは、スペイン北部のバスク州の独立運動にかかわる過激集団。ちょうど南のアンダルシア州のセビリアでは、ヨーロッパ・サミットが開かれており、そこに集っている各国の首脳またメディアに、自分たちの主張と存在を誇示したかったかのようでした。

2001年の9.11のニューヨークのテロ事件から始まって、残念ですが現在は世界のどこで何が起こってもおかしくない時代になっています。そしてそこには、日本人も居合わせていることが多い。これだけ海外旅行が一般化し、国際交流が多様化したなかで、日常的な状況掌握の大切さを改めて心に期したものでした。



清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワーク
として作品の舞台を訪ねている。
東京都 昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>